田中励儀先生・山田和人先生を送る辞

この度、田中励儀先生・山田和人先生のお二人がともに二〇二三年三月をもってご退職の時を迎えられる。田中先生は一九八五年に、山田先生は一九八六年に同志社大学に着任され、四〇年近くの長きにわたって教鞭を執ってこられた。僭越ながら、ご一緒させて頂いた同僚の一人として送別の言葉を申し上げさせていただく。

両先生はともに著名な国文学研究者であり、田中先生は泉鏡花など幻想文学を中心とした近現代文学、山田先生は歌舞伎・浄瑠璃・からくりなど近世の演劇を中心とした近世文学の分野の研究で、大きな業績を残しておられる。お二人とも、関連学会の役員なども数多く務めておられ、学界をリードしていく存在でもあった。

学内では田中先生は二〇〇二～二〇〇三年度に大学評議員、山田先生は二〇一七年に大学評議員を務められるなど、大学の公務にも尽力された。ともに教育熱心な面は共通であるが、お二人の性格か、指導の方法や場面などは大いに違っていたようである。田中先生は、研究室近くの別室で学部生や院生を指導しておられる姿を拝見することたびたびであり、留学生の指導なども含めて細かく丁寧な指導は、先生の指導された卒業論文、修士論文、博士論文を見れば一目瞭然である。山田先生は、翻刻の会を指導され、毎週学生の会員を集めて指導をなさっているのをよく拝見した。その成果は、『同志社国文学』に毎年掲載される翻刻紹介に成果として現れており、ゼミ生以外の学生まで幅広く導いてこられた。

大学院では、田中先生が二〇〇〇年、山田先生が二〇〇三年から大学院の後期課程に任用されてともに多くの研究者を輩出しておられる。大学院の授業では何度もご一緒させて頂いたが、お二人の鋭い質問には、分野の異なる私にも納得させられることが多かった。学科会議でも、お二人の大所高所を見渡したご意見は、判断に迷うような事案に対してしばしば羅針盤のように思われた。問題の急所を鋭く突く田中先生、大局を見渡した意見を述べる山田先生という印象であるが、ともに学科の会議では欠かせない存在であった。お二人のご退職のあとは、今後の国文学科の舵取りも後輩教員が引き継ぐことに

なるが、二人の築かれた学科の伝統を損なうことなく、今後も継承・発展させたいと思う。

個人的な面では、田中先生は鉄道や演歌を趣味とされ、山田先生はとにかく活動的で研究活動でも海外に出かけるほどアクティブな方である。大学の行事後の二次会などで、お二人の歌唱を拝聴したことなども私にとって楽しい思い出である。お二人の学問的知見はもちろん、大学、学科の運営のことなども含めてこれまでのお二人のご貢献に思いを致し、あらためて感謝申し上げたい。

田中先生・山田先生、ご退職後も国文学科の今後を見守り、お導きくださいますようお願いいたします。拙い文ではございますが、両先生のご多幸とご健康を祈って贈る言葉とさせて頂きます。

藤井俊博